

地図帳から探る外国との結びつき

長崎市立佐古小学校 赤瀬 浩

1 日本地図を見て驚く「長崎っ子」

地理的な概念や感覚を養うために、3年生から段階的に地図指導を行っている。自分たちの身近な地域からはじめ、地図の範囲を同心円的に拡大させていくと、長崎県では市・町の段階でどこでも「海」が登場する。長崎県は島と半島で構成され、海岸線から最も遠いところでも直線で13kmしかないといわれている。海に囲まれているために、子どもたちは早くから自分の市町や県の形を認識している。このことは身近な地域の地理的な概念を早期に形成させるという長所がある一方、県の位置的には多くの子が驚きをもつという体験となる。たとえば『楽しく学ぶ小学生の地図帳 初訂版』p.1～2やp.57を見た子どもたちは長崎県が左端（西端）ぎりぎりにあり、p.21～22では欄外に記入される地域も多いことに愕然とする。これまでは同心円の中心に位置していた自分たちが、実は周縁のほとんど外側に位置している事実はショックなのだろう。

2 歴史上の長崎県の位置

6年生の社会科では主に日本史を舞台に歴史の基礎を学ぶ。3・4年生での地域の伝統や文化財などの学習を踏まえて、視野と対象を日本全国と主要な人物に広げる。しかしここでは日本の中央部の歴史を学ぶことになるため、長崎などの地方では歴史が身近なものでなくなっていく。そうしたなかで、地方が

きらめく一瞬が必ずある。そこを中心教材として探究していくことが歴史を身近に感じさせる手立てとなる。

6年生の歴史学習で長崎県が最初に登場するのが遣隋使・遣唐使である。日本最後の寄港地として、平戸島や五島列島が登場し、そこから東シナ海を渡って大陸への航路が続く。先進的な政治や文化の移入したルートを学んだ子どもたちは長崎県が日本の玄関口であったことを知る。これまでの周縁にあるという意識がわが国の先端にあるという意識に変わってくる。さらに、元寇の侵攻ルートで、大陸に近いという境界意識をもち、鉄砲やキリスト教の伝来、オランダ船の出島への航路などを学ぶと周縁意識をもつことがほとんどなくなり、むしろ長崎県の位置が日本にとってきわめて重要な地点であるという認識をもつ。



写真1 出島の見学

3 わが国の動脈・出島への海道

長崎名物カステラはポルトガル伝来の洋菓子をアレンジしたものだが、ポルトガル人がわが国に伝えた文化の一つである。遺跡や遺物は鎖国によってほとんど破却されたが、カステラはわが国の対外交渉史の証拠になっている。他にもポルトガルからはパン、タバコ、ボタン、カップなど、オランダからはコップ、ランドセル、ゴム、ブリキなどの文物が伝わ

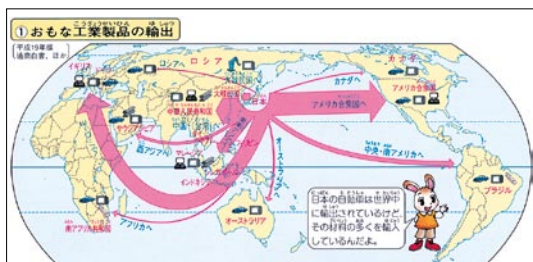


図1 ポルトガル船・オランダ船の航路

り外来語として残っている。ポルトガルやオランダの船が船載してきたものが長崎から全国へ広がっていった。子どもたちは世界地図に舶来の経路図を書きこむ。さらに長崎から全国へ広がっていくイメージを矢印であらわす。出島への海道は海外と日本を結ぶ大切な航路であることがわかる。このような活動を通し、外国とわが国のつながりや長崎の果たした役割を理解することができた。

4 世界との結びつき

視点は現代に移る。3学期になると6年生の社会科では世界各国のくらしの違いを事例的に学ぶ。また、世界との貿易や交流などを学ぶために地図帳を活用している。p.61の「おもな工業製品の輸出」と「おもな食料と工業原料・製品の輸入」のグラフをみると矢印の



『楽しく学ぶ小学生の地図帳 初訂版』 p.61

太さが量的に表されているので、視覚的に外国との結びつきをとらえることができる。子どもたちは、海外と出島をつなぐ細い1本の線が、現代ではこのように太くさまざまな国と結びついていることに驚きをもつ。説明文や統計数字だけでなく、地図上に表された事実子どもたちの理解を視覚的に促している。

5 さまざまな視点を育てる地図学習

産業学習や歴史学習を通して、子どもたちは日本や世界の客観的な姿を理解し、それを地図上で確認する。位置や地勢、地理的条件などは地図を通さなければイメージ化することはできない。



『楽しく学ぶ小学生の地図帳 初訂版』 p.50

地図は学習の場だけではなく、家庭の中にも広がっていく。テレビのニュースの事件や事故、出来事には必ず地図が添えられる。新しい地名が毎日子どもたちの耳へ入り、頭の中の地図帳に書きこまれていく。その地図帳には名所・特産物・人物・気候などのさまざまな情報も記録される。このようにして、一人ひとりの頭の中の地図帳ができあがっていく。それを手助けしていくのが学校の地図指導である。私はそう思う。

(協力：長崎市立佐古小学校6年のみなさん
絵地図 (図1)：森本若七さん)